

肢体不自由児の教育考える



ベッド上でモニターを見ながら視線でポッチャのボールを投げる角度を操作する生徒。15日、熊本市西区

熊本市で全国大会 ICT技術活用 公開授業

病気などで身体が不自由な子どもの教育について考える「全国肢体不自由教育研究協議会」が14、15日、熊本市であり、全国の特別支援学校の教員ら約400人がICT技術活用の取り組みなどを学んだ。

15日にあった公開授業のうち、熊本かがやきの森支援学校（熊本市西区）小学部の授業では、指先を動かす練習として4年生の男子が木型を枠にはめる作業を教員が1対1で指導した。タブレット端末のタッチパネルで操作するゲームを使って遊びの要素を取り入れた活動を交え、指の使い方や力の入れ方を練習した。中学部の保健体育の授業では、2、3年の8人がプラスポーツのポッチャを体験し

た。人工呼吸器を装着してベッドから起き上がれない生徒は、視線でボールを投げる角度やタイミングを操作できるICT機器を使ってゲームに参加した。

特別支援教育で使われるICT機器の体験コーナーも設けた。視線で文字を入力できるシステムや熊本高専が開発したタブレット端末などと操作スイッチをつなぐ装置を展示した。

大会実行委員長で熊本かがやきの森支援学校の富永佐世子校長は「各学校が進めるさまざまな取り組みを情報交換した。子どもたちの可能性を引き出すためにも、教員がICT技術をいかに活用するかが重要になっている」と話した。

大会は全国各地で毎年開いている。記念講演や各地の教員によるポスター発表もあった。（丸山伸太郎）